

## 論理的な答案論文の「構造」と「要素」の理解

### 1. 合格できる答案論文とは

分かりやすい記述試験の答案の基本について、本講座の第7回で解説しました。その解説で、答案が論理的な構造でできていて、説明に用いているキーワードが適切であることが評価を分けるポイントであると理解していただいたと思います。よって論理的な論文の「構造」と「要素」について、きちんと理解し、身につけておくことが重要です。説得力がある論文は、「全体構造（大きな構造）と細部構造（小さな構造）を構築」し、論理的な記述順序で書かれているという、基本が守られています。

合格できる答案は、「論点が明確」になっていること、「読みやすく（わかりやすく）」説明に用いているキーワードが適切でかつ「説得力がある」、つまり・・・論理的な「構造」を必要な「要素」で組み立てていることです。

この回と次回（第9回）ではこれまで解説してきた基本を総括して、答案の構造の解説、基礎的な構造の組み立て方と、記述の順序の要点について解説します。

### 2. 合否を分ける論文の構造

合格できる解答論文とは、次の3つの必須条件をすべて満たした答案です。

(1) 問題文、つまり設問についての「正確な理解」

⇒ 問題文の意図の正確な読解、つまり解答の指示事項（主題、キーワード、切り口、条件、書き方の指定、提示された背景、資料、図表の要点等）を把握

(2) その理解に基づいて進める「論理的な思考」

⇒ 主題とそのキーワードを説明する概念、切り口、条件、制約事項、問題点、課題、解決策の論理的な記述の流れ

(3) 自らの思考を、読み手に対して説明・説得できる「分かりやすい構造・記述順序、表現、用語」

⇒ 問題文に従って解答する論文の全体構造、パラグラフでの展開、各解答文の組み合わせ、適切な用語（キーワード、数値）すなわち「要素」を使った分かりやすい説明

自らの知識と経験と能力を存分に発揮することによって、与えられた設問を適切に理解し解釈をして分かりやすい説明をすることです。

まず設問に対する「正確な理解」とは・・・問題文をよく読むことによって、「質問の意味、求められている解答の主旨および解答の形式（書き方の指示）を間違いなく理解し、実現すること」で、当然のことです。しかし、これが意外にできていない答案もあります。

問題文に「あなたの意見を述べよ」としているにもかかわらず主題があいまいな論評になってしまっている、課題と問題点を混同している、論述の焦点がずれて記述の流れが悪い、「問いごとに用紙を替えて」あるいは「1つの問いに1枚で」、と書かれている指示を

見落とす、「3つ挙げよ」としているが、その3つが類似したり偏っていたり、といった例には事欠かないのです。

次に、「論理的な思考」とは・・・それは、設問における課題は何か？課題を達成する上での問題点は何か？ 制約条件は何か？トレードオフをどのように調整するのか？等を考えて、モレ、ダブリがなくバランスよく、無理・矛盾や飛躍がなく、事実と意見を明確に分けて整然と組み立てることです。

つまり「論理的」とは、思考の筋道に欠落、矛盾や飛躍がなく明確な論拠を持って考察して判断し、要素（キーワード・概念）の充足や繋がりによって、説明することです。

論拠とは、事実に基づく根拠から主張や結論へ導く理由です。「論理的な答案」とは、言葉と言葉、文と文に意味のある繋がり（関係性）が明確であり、関係の薄い言葉や文章を不用意に挟まないことです。さらに論理性を文と文の繋がりでは、「論証」という考え方が必要です。「論証」とは何らかの考えや意見（主張あるいは結論）を、それを支持する理由あるいは根拠とともに提示することです。

問題を一読した瞬間、難問と思えるような設問でも適切に読み解き理解し、しっかり考え抜いて「分かりやすい構造、表現、用語」で制限時間内に記述する訓練を積むことにより、上記の3つの要素を満たす答案をめざすのです。ここで書くべきなのは報告書でも、感想文や論評でもなく、答案の論文です。

技術士第二次試験の記述式試験で測られるのは、主に次の能力であることは明確に示されています。

一つは、選択した専門科目①での「専門知識と応用能力」、すなわち、幅広い知識・知見であり、それを説明することができるキーワードの理解と表現力です。つまり、合格のためには常に多くの情報に接し、課題を構造的に認識し、自分の知見として消化して鍛えておく必要があります。これは常日頃から心がけておかなければ、一朝一夕に身につけられるものではありません。

さらに平成25年度の試験からは必須科目Ⅰと選択科目Ⅲにおいて「課題解決能力」を評価されます。つまり、技術部門全般や選択科目において、課題や問題点を見だしそれに対する解決策を提案し実行できる能力の評価が重要な事柄です。課題解決力の説明には、論文の構造をきちんと構築していることが重要です。つまり、論理的すなわち論点を明確にして、流れを作り、説得力を持ってまとめるということであって、これは訓練して鍛えることができる技術（テクニック）です。

表一 1 技術士第二次試験の筆記試験で求められる能力の意味

試験科目		能力の意味
Ⅰ 必須科目	択一式	選択した技術部門に関する基礎的・専門的知識(5答から正解1答選択)
	記述式	技術部門全般にわたる専門知識、応用能力、問題解決能力及び課題遂行能力
選択科目	Ⅱ-1 専門知識	各専門分野に関する基礎的・専門的知識
	Ⅱ-2 応用能力	原理・原則、理論・定理、既存の知見を実際の場面や他の分野に、利用目的や評価基準などを明らかにして、利活用して新たな知見を創出する能力
	Ⅲ 課題解決能力	与えられたテーマに関して、課題や問題点を見だし、それに対する技術的な解決策を提案し、実行できる能力

### 3. 論理的思考法（ロジカルシンキング）の手法

情報整理と、答案を書き始める前に行う準備の訓練として、論理的思考法（ロジカルシンキング）の手法を用いて考えを整理することが望ましいのです。

論理的思考法（ロジカルシンキング）とは、

- ☆ 根拠が明確である
- ☆ 展開の筋道がつながっている
- ☆ 結論がはっきりしている
- ☆ 事実に基づいている

ことを、相手（読み手）の立場で分かりやすい言葉を使って説明することで、一見複雑で難しそうな事項を単純にし、（誰が見てもわかりやすく）構造化するための方法です。

例えば思考の手法として、

**ゼロベース思考**：コンセプト＝本質を探究する時は、先入観や偏見が邪魔になるので、まずゼロベースで考える。

**フレームワーク思考**：見落としがあれば本質を見誤るので、モレやダブリがないかフレームワークで考える。

それらのツールとして、ロジックツリー、ピラミッドストラクチャー、マトリックス等がある

**オプション思考**：違う切り口の視点からの多様なオプションで創造性を広げる。

プロセスの展開として、ミッシー（MECE）、マインドマップ、ロードマップ等の手法が考案されています。日頃からこれらを活用しておくことが重要です。

### 4. 論文の大構造と小構造の原則

「世の中のすべてのモノや事象は必ず、ある『構造』でできており、この構造はいくつかの『要素』が絡み合う形で作られています。」（『失敗学』の権威：畑村洋太郎氏の著書による）

解答論文を組み立てる際も、「構造」は、大きいものは論文全体の「枠組み（フレーム）」、「構想」であり、小さい構造は「項目」あるいは「章」、「パラグラフ」の構成であると考えられます。「要素」は意味のあるパーツすなわち、キーワードでありそれぞれの概念です。答案のような文書では、構造とは書式あるいは形式、要素とは文章からなる内容・さらに細かく分けると単語となります。ここではモノ造りに例えて解説しています。

すべての構築物を生産する場合と同じように、答案作成でも計画・準備と「構造」の設計、そして組み立て順序を疎かにしたまま構成「要素」を手当たり次第につぎはぎして組み立てても、合格レベルの答案には届きません。

「要素」とは答案を構成する意味のあるパーツすなわち、キーワードでありそれぞれの概念で、単文に組み立てて用います。

「構造」は、解答論文を組み立てる際の大きいものは論文全体の「形式」「枠組み（フレーム）」、「構想」であり、小さい構造は「項目」あるいは「章」、「パラグラフ」の構成です。全体構造や細部構造の構成については、どういう出題になるか予想し、出題毎に予め組み立てる訓練をしておくことが有効です。

一方、各「要素」は、構造を作り出している部材です。予想される選択科目記述問題ごとの答案に用いるために、それぞれ個人の知識と経験で習得しなければなりません。習得

している「要素」を用いて即興で適切な構造に組み立てられる訓練をしているかどうかで、受験者の能力が測られることになり、そこに実力に差がつくところです。

受験を志した段階で、「要素」がすでに習得できている人は、構造の組み立て方を理解して記述する訓練をすれば短期間で合格レベルに達します。逆に構造の組み立て方がすでに身につけている人は、要素を習得して自在に操れるように訓練すれば、3回以内の受験で合格に達します。「要素」を習得して論理的に答案の「構造」を作り出す能力は、受験だけでなく情報の受発信を含めたあらゆる職務での基礎力といえます。その基礎力と経験・知識を駆使して課題を解決する能力が「コンピテンシー」（高い業績を生む重要な行動特性や行動能力）です。受験することを通じてコンピテンシーを磨いていくことがプロの技術者＝職業人として重要なのです。

予想される各問題の答案に用いるそれぞれの「要素」は、各自で準備し把握しておかなければなりません。一方、全体構造や細部構造の構成については、どういう出題になるか予想し、出題毎に予め組み立てる訓練をしておくことが有効です。それぞれ把握している「要素」を用いて即興で適切な構成に組み立てられる訓練をしているか、受験者の能力が測られることになり、そこに実力差がつくところです。

#### 4-1. 論文の構造は大小の二つ

論文の構造は大小の二つに分けて考えることができます。一つは「序論」、「本論」、「結論」といった論文全体を形作る大きな構造です。もう一つは、次回の第9回で解説するパラグラフ、文（センテンス）、といった各部分の小さな構造の組み合わせです。この両者がきちんと構成されることにより、はじめてよい論文・報告書になります。小論文や短い報告書の場合は、こうした大小の構造を組み立てることで構築できます。論文の構造は文章全体の長短にかかわらず、ひとつのテーマに関してまとめたものです。（ワンドキュメントワンテーマ）

論文には、**全体構造（大きな構造）**と**細部構造（小さな構造）**をきちんと構築し、分かりやすい、意味のある記述順序で配置されているという、基本が守られていなければ説得力がある、すなわち合格論文とはなりません。全体構造や細部構造の組み立ては、出題毎に予想しておくことが難しい（つまり予想しにくいような出題にあえてしている）ので、多くの場合出題を見てから適切な構造を即興で組み立てることになります。

要素つまりキーワードの暗記、そして他人が書いた答案の筆写（模倣）のみに努めるだけでは、臨機応変に全体の組み立て方を身に付けることはできません。以前の評価基準では、キーワードをできるだけ多く並べることによって、専門知識に関する評価ポイントを稼ぐことができました。しかし、現行での評価基準では、選択した専門科目ごとの「**専門知識と応用能力**」、すなわち、幅広い知識・知見であり、それを説明することができるキーワードの理解と表現力です。そして与えられたテーマに関して、課題や問題点を見だし、それに対する技術的な解決策を提案し、実行できる能力です。

どのような出題に対しても、適切な構造を構築し、必須の「要素」（パーツ＝キーワード）を用いて記述するために、まず論文全体の構造がイメージできる書き出し部分と細部（項目）の構造を、各テーマの要素を用いてきっちり組み立てる訓練を重ねることが必要です。

## 4-2 論文の三つの部分からなる基本構造(大きな構造)

論文の大きな構造は、全体として「序論」、「本論」、「結論」あるいは「概論」、「各論」、「まとめ」の三つの部分から構成されることを説明しました。実際には長い論文・報告書等であれば、本論あるいは各論が多く、章に分かれていたりします。しかし、論文・報告書であれば、どんなに長くても短くても、どのような章や項立てになっているかにかかわらず、一般に必ずこの三つの部分から構成されます。本論あるいは各論の部分も、パラグラフ (小構造) 同士のつながりに気をつけ、円滑に論が進むように組み立てます。

### 序論：

「序論」は論文全体の概要を簡単に紹介する導入部分です。この論文が「何を目的(意図)として書いているか」「どのような現状か」「どのような問題意識を持っているか」「どのような結論に至ったか」「今後どのように議論し、検討していくか」ということを、ここを読めば書き手が何を考えて、何をこの論文で主張しているのかがつかめるようにしておきます。特に、採点のため一度に数多く次々と目を通す試験の論文では、序論が論文全体の印象に大きく影響することに留意して記述します。

「序論」に結論を書いてもよいのです。むしろ、序論で結論を明らかにしておくことが理解を早めます。一般の小説などの文章では最後に結論(結末)が披露されるのが普通です。「予想外の意外な結末」が重要で、それを楽しむ推理小説なら結末を先に出されたらなおさら興ざめです。しかし論文は、小説と違って「結論はこれである、こうした方法によってこのような結論に至った」という結論とそのプロセスを検証していくことを目的として書くものです。だから、「序論」に結論を先に書くことによって読み手は結論を念頭に置き、書き手が展開するストーリーを予想しながら議論を追うことができ、理解されやすいのです。

### 本論：

「本論」は、書き手が主張したいことに沿った客観的な証明を積み上げていく部分です。ここでは定説、理論、確認できる情報、データなどによって議論を進めます。まだ書き手の意見を述べるのではなく、本論の途中に余分な情報を入れてはいけません。「論文の主張を証明および説明すること」に専念しなくてはなりません。

序論で挙げた現状に基いてあるべき方向である課題とその課題を達成するための問題点を述べます。

### 結論： (私の考え)

「結論」は裁判でいえば判決文に相当する部分です。「本論」で客観的な事実・証拠を積み上げ有罪あるいは無罪を宣告する判決、つまり書き手が考えて主張する結論を述べます。しかし単なる結論のみではなく、「本論」で提示したことを要約して「・・・であるから私はこう考え、結論に至った」のように主体的に導き出します。

結論で重要なのは、あなたの考えを求められているにもかかわらず、「・・・と思われる」のように、主語があいまいな評論家風の文章にしてしまうと、すべて台無しになることです。

## 4-3 小論文ではパラグラフ(小さな構造)の組立と、並べ方が特に重要

小論文や短い報告書では、小構造の出来、つまりそれぞれのパラグラフの組立が全体の印象を左右します。技術士第二次試験の課題論文では、解答として記述すべき事項が小設

問として指定されているので、大構造は自ずと決まります。また本論の補強材料として用いる論拠は書き手本人のオリジナルな発想というよりも、既存の資料の知識に基づく知見を組み立てた上に結論を導くものがほとんどです。独自の奇抜なプロセスや結論を誘導して目を引くのではなく、自分が得た知識・知見を自分の考えとして消化して、いかに論理的な論文として文章を構成するか、いかに議論を円滑に進めるかがポイントになります。すなわち、答案では自分が設問を正確に理解し、その理解に基づいて論理的に思考していることを読み手（試験の場合は採点者）にすぐにわかってもらえるような書き方が重要なのです。

さらに、論文の書き出しあるいは項目の組立方で全体構造を表現することは、受験者がこの出題の意図を理解できていることを採点者に納得させることに役立ちます。仮に「要素」すなわちパーツあるいは詳細説明部分での枝葉の一部が紙幅制限によって不足していても、合格になる可能性は高くなります。

逆に、全体構造である論文全体の内容構成、そして総論あるいは結論があいまいであったり、記述順が無秩序であったりして、幹に相当する部分がしっかりしていないと、個別の要素を数多く並べたとしても、記述の趣旨がわかりにくくなりがちです。その結果、受験者は出題テーマの意図を的確に把握できていない、要素を単に丸暗記して並べているだけで、全容を理解できていないとして、合格点は獲得できません。

コツとしては、まず各パラグラフの組み立てとして、冒頭に書く主題文（ここではトピックセンテンスと呼ぶ）にあたるものを書き出す訓練をすることを勧めます。

パラグラフの組み立て方と並べ方については、次回第9回の講座で解説します。

問題を熟読して設問を適切に読み解き理解し、しっかり考え抜いて分かりやすい構造、表現、用語、キーワードを使って制限時間内にきっちり記述する訓練を積むことにより、前記3つの合格への必須条件を満たす答案をめざすのです。

導入部分は、標題を「はじめに」として項を設けてもよいし、無題で段落を明確にして書き始めてもよいですが、必ず、総論、概論部分として書き出します。いきなり各論にはいる答案を見かけますが、概論あるいは総論抜きで、各論から始める文章を読まされると、読み手には答案の全体が冒頭でつかめないまま、各論の間のつながりを把握することが難しくなります。

「はじめに」として項を設けるならば、「おわりに」を設けます。「はじめに」と「おわりに」はセットで使う項目なのです。しかし「はじめに」と「おわりに」は、必ず設ける必要はありません。無題で項を設けない場合は、あとがきは項として必要ではありませんが、締めくくりあるいはまとめの文章を設ける方が、収まりがよい場合があります。

「課題を3つ挙げよ」と複数の列挙を指定する場合や、挙げる課題の数に指定がない場合もあります。課題を解決するための方策についての意見は、全ての出題で最も重要な記述要求事項です。

## 5. 記述式問題共通の取り組み方

記述式問題には、まず問題文を正確に読み取って、その出題意図に従い忠実に答案を作成することが合格の基本です。制限時間が厳しいので、問題文の出題意図を重要な語句の意味から素早く正しく理解する必要があります。その語句とは、**テーマ（キーワード）、出題の背景、問題の切り口、記述の条件、書き方の指示**の表現であり、それぞれ記述式の問題Ⅱ－1，Ⅱ－2，Ⅲにも共通です。問題文は、以下の重要語句で組み立てられています。

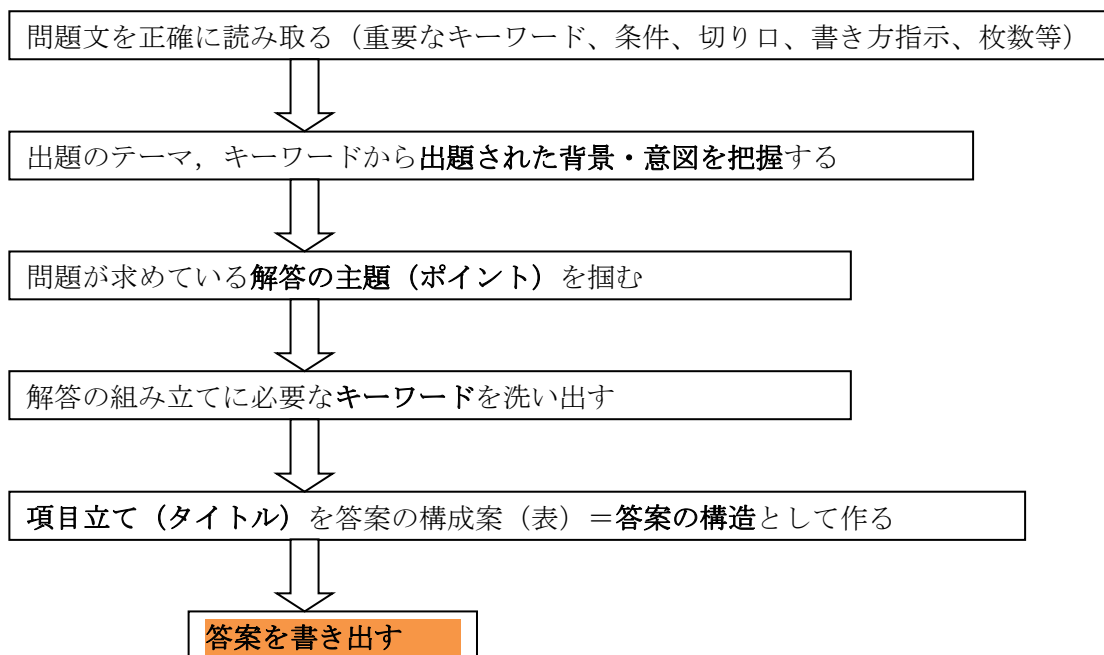
表－2 問題文の重要語句

区分	意味	例
テーマ	出題で問われている主題 (本題) (キーワード、概念、定義等)	墜落・転落災害の防止 温度ひび割れ発生の抑制 PFI 導入 等
切り口	主題について書くことを求めている内容や属性	特徴、背景、効果、対策、現状、原因 課題、提案、検討事項、効果、問題点 メリット・デメリット、リスク 等
条件	記述する際に指定している、 前提・範囲、与件、記述内容、 方法(例：図示)、枚数など	発生メカニズムの説明、施工上の対策 交通事故、渋滞が多発している交差点 ハード・ソフト両面 等
書き方指示	答案の記述形式	列挙せよ 挙げよ 述べよ 説明せよ 概説せよ 論ぜよ 論述せよ 等

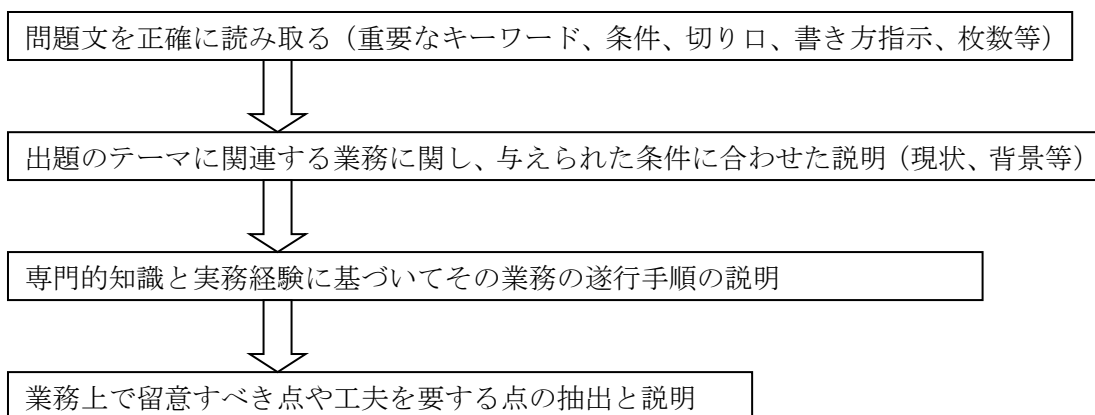
すべての問題に、記述を求めている項目、内容で答案をまとめるポイントを挙げます。

- 1) 問題文の出題意図、使用されている用語、概念を正確に把握する。
- 2) 答案の構造、記述順序、記述の概要、キーワードを整理・メモしてから取りかかる。
- 3) 正解に必要な主要な項目、内容は落とさない。求められていないことは書かない。
- 4) 2つあるいは3つ求めている項目はそれぞれ主要なものを、バランスよく挙げる。
- 5) 各項目の説明内容も偏らないで均等になるように、広く浅く記述する。
- 6) 答案用紙1枚(600字)を30分(構想3分+記述25分+見直し2分)以内で仕上げる。

これを答案作成前のプロセスのフローにして示します。

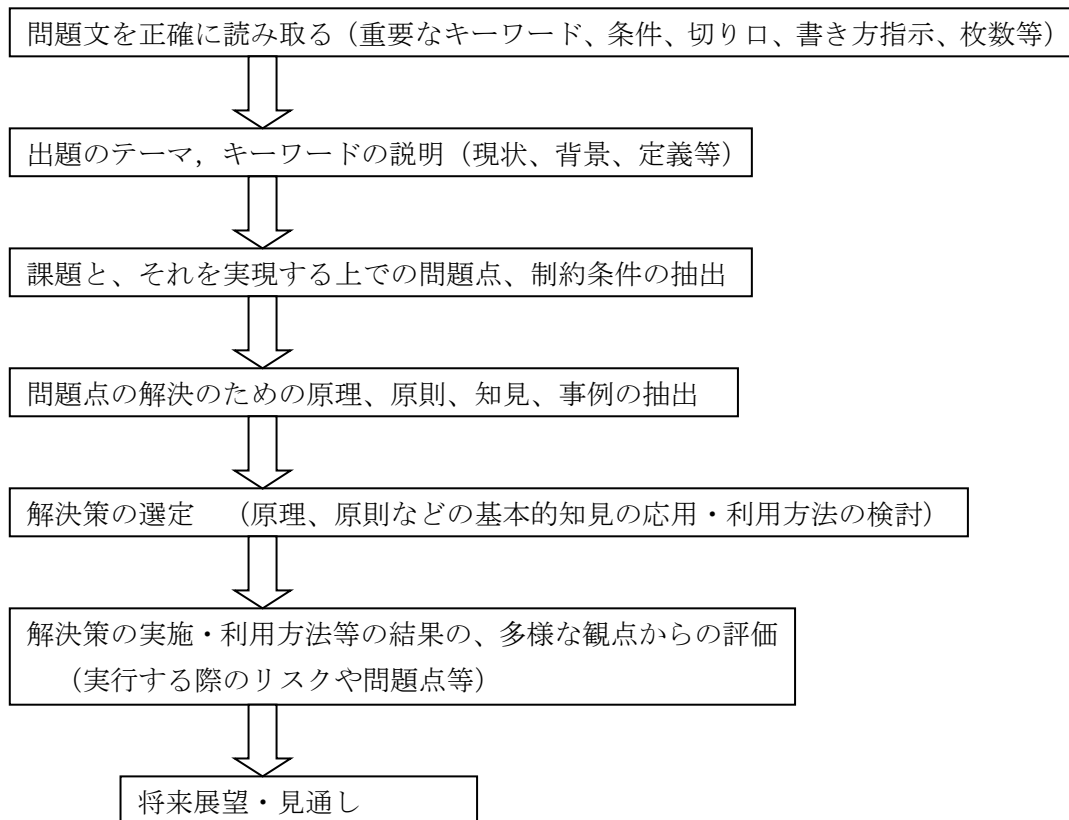


図－1 必須科目と選択科目（記述問題）共通の答案作成前のプロセスフロー



図－2 問題Ⅱ－2 応用能力問題答案作成のフロー





図－3 必須科目（記述式）問題Ⅰと選択科目問題Ⅲ 課題解決問題答案作成のフロー

次に必須科目Ⅰと選択科目Ⅲでの課題解決力を問う、答案の構造と要素のイメージを示します。

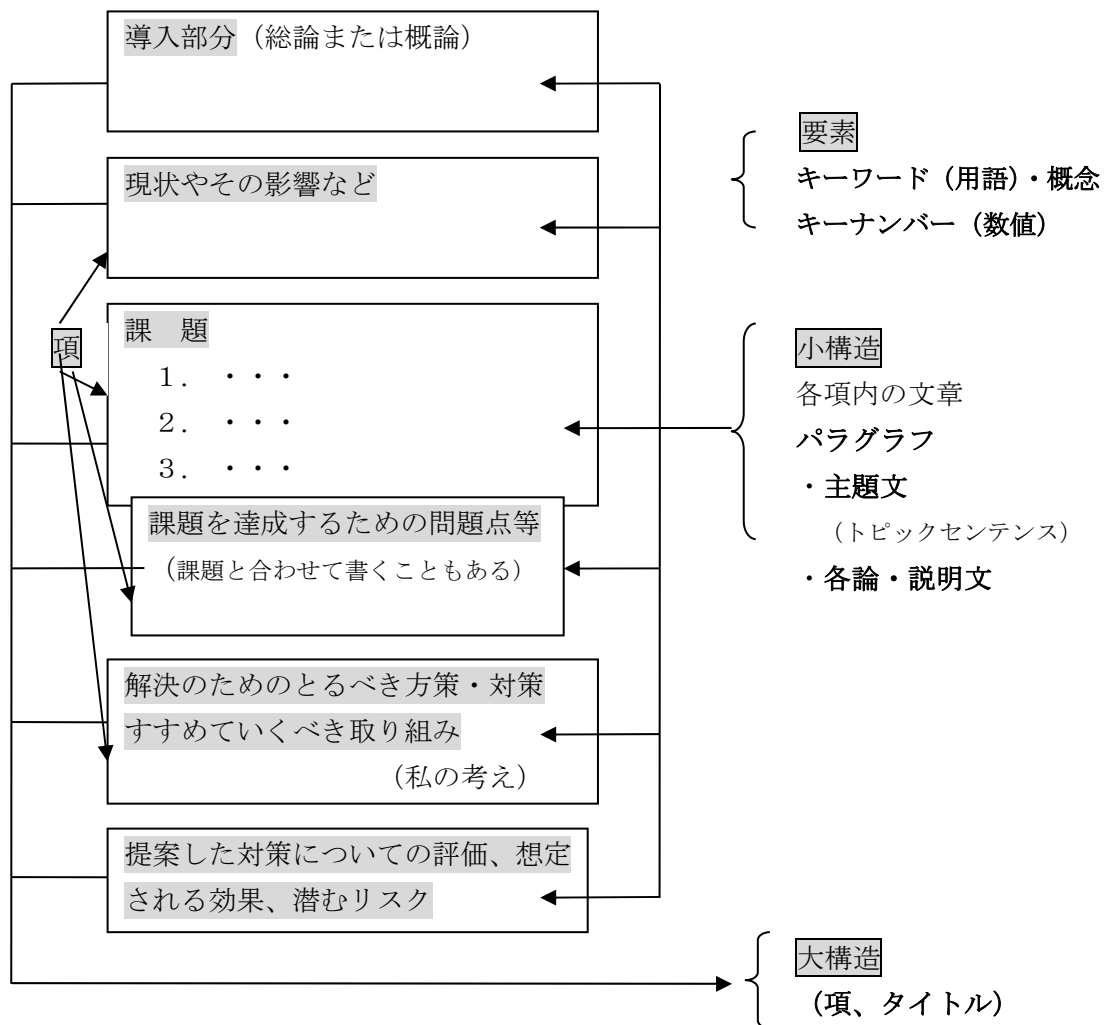


図-4 必須科目 I (記述式), 選択科目 III 答案の大構造・小構造と要素のイメージ

これは、標準的なスタイルです。設問によって、要求されている記述内容、項目に合わせてタイトルを設定します。

以下の答案例は、添削の依頼を受けた添削前の文章です。

次回 (第9回) に例示する添削後の答案例と読み比べてみてください。

後に解説しています。

問題文: 鉄筋コンクリートのひび割れの発生メカニズムと影響因子を2例挙げて説明し、ひび割れ防止のための取り組みについて述べよ。

添削前の元の答案例

1. 乾燥収縮ひび割れ発生メカニズムと影響因子

(1) 乾燥収縮ひび割れの発生メカニズム

硬化したセメントペーストの固相は、未反応のセメントと微細な水和物ゲルとからなっている。セメントペーストが乾燥収縮すると、水和物ゲル内の自由水が蒸発し収縮する。一般にコンクリートの乾燥による収縮率は、相対密度 50%~70%で、 $150\sim350\times 10^{-6}$  程度である。この収縮が壁周囲の柱や、梁・内部鉄筋の拘束によって抑制されると、内部に引張り応力が限度を超えるとひび割れが発生する。

## (2) 影響因子

①単位水量:コンクリートの練り混ぜ時施工を確保するために多くの水が使用される。乾燥収縮ひび割れを少なくするためには、コンクリートの単位水量はできるだけ少なくする必要がある。

②セメント:普通セメントを基準とすれば、高炉セメントの収縮率が大きく、中庸熱セメントの収縮率は小さい。セメントの種類によって乾燥収縮率に差がある。

③乾燥時期:乾燥収縮ひび割れにはコンクリートが硬化し始める初期材齢で発生する初期収縮によるひび割れと、コンクリートが硬化後、材齢2～3ヵ月以降に発生するものがある。

## 2. 温度ひび割れの発生メカニズムと影響因子

### (1) 温度ひび割れの発生メカニズム

・ 内部拘束による温度ひび割れは、内部温度の上昇に伴い、中心部の温度が高く、表面部はそれより低い状態になり、この表面と内部の温度差に起因するひずみが発生する。

・ 外部拘束による温度ひび割れは、コンクリートの温度上昇によって自由に膨張したコンクリート部材が、その後の温度降下に伴って自由な収縮ひずみが、外部から拘束を受けるため引張り応力が発生して起こる

### (2) 影響因子

①セメントの種類とセメント量:コンクリート材料のうち温度ひび割れに大きく影響するのは、セメントの種類とセメント量である。

②単位水量:強度は水セメント比に連動するため、同一強度を得るためには単位水量が少なくなるほど、セメント量も少なくなる。

## 3. 温度ひび割れの発生防止の課題

以下略

## 4. 温度ひび割れ対策の今後の取り組み

### 解説

(記述の中味の適否も含めていますが、主に書き方を解説します)

上記の答案には前文がなく、冒頭に「1. 乾燥収縮ひび割れ発生メカニズムと影響因子」という項で各論について、いきなり書き始めています。問題文は、「ひび割れの発生メカニズムと影響因子を2例挙げ」ることを求めています。こういう答案を書く人も多いのです。

そこでまず記述を選択する2例を挙げておくことが答案の概要を理解してもらうための準備として大事なことです。これでは採点者は、答案の概要を理解するための準備ができないまま読み進めなければならないので、まず印象を悪くします。

設問にそのままストレートに入る書き方でよい場合は、問いが「乾燥収縮ひび割れ発生メカニズムと影響因子を述べよ。」であればこれでよいのですが、実用文を読むことは、初対面の人と仕事上の会話を交わし始めることに似ています。相手がどんな人かイメージを早くつかみ、話題をかみ合わせたいと考えます。文章を読み始めるときもそこにどんな内容が書かれているのか、全体像を早く知って、早く正しく理解したいと思うのです。

この答案を合格レベルにするには、まず冒頭にここで何を論ずるのか、ということを書きます。つまりこの出題に対しては、答案に取り上げるひび割れについて、「収縮によるひび割れ、膨張によるひび割れ、の2つの例に分けて説明する」と、まず宣言します。

次にひび割れの発生原因を大きく分類・整理した上で、収縮、温度変化、外力、材料の体積変化、劣化等の種類があることを解説しておきます。そのうちの典型的な2例について、問題文に従った順序でそれぞれの影響因子、ひび割れ防止の課題、取り組みに分けて記述していくことが答案全体の早い理解に結びつきます。(ただしひび割れの分け方は他にもあり、またここに取り上げる2例も任意です)

そうすることによって、受験者がひび割れ現象の全容を理解できていることをまずアピールしておくことができます。いきなりチマチマと各論に入ると、答案の全体像が見えないため、この受験者が「ひび割れ」という現象の全容を本当に理解した上で書いているのか、ある要素部分を丸暗記しているだけではないかと、その後の内容の如何に関わらず、疑問を持たれるのです。この答案ではその先の展開でも、影響因子の内容の記述が適切でない上、「乾燥収縮ひび割れを少なくするためには、コンクリートの単位水量はできるだけ少なくする必要があります。」と、ここに書くべきではない対策まで書いていることで、求めていることを書いているとして評価が下がります。

次に2つ目のひび割れとして「2. 温度ひび割れの発生メカニズムと影響因子」を挙げています。影響因子が1. に記述した「乾燥収縮ひび割れ」と重複し、答案全体の組み立て方につき、記述例の選定に工夫がみられないことが、さらにマイナスの印象になります。

賢察の通り、この答案には間違っただけを書いている訳でもなく、むしろ（あまり必要ではない）詳しい記述があります。合格点に達している答案ではありますが、構造も内容にも、さらに工夫する余地がある答案例です。

次回（第9回）は「**パラグラフの組み立て方**」について解説します。

第8回講座終了